

平成 30 年度 二学期 終業式 式辞

おはようございます

今日が 2 学期の終業式ということで、こうやってみんなで集まるのも年内は最後です。

今年 1 年、みなさんにとってはどんな 1 年でしたか？ また平成の終わりでもあるので、その振り返りも、昨日のニュースで数多くしていました。

お話をしたいことは、数多くありますが、その中で、ひとつのニュースを選びました。

2025 年の大坂万博決定です。7 年後に大阪で、万博が開かれます。この 7 年間、僕たちはどう過ごせばいいのでしょうか、そもそも万博とは何だろう？それが知りたくて一冊の本を読んでみました。前回万博のシンボルと言われる「太陽の塔」を製作された岡本太郎さんの本です。30 年前、1988 年、昭和の最後の年に発行された本ですが、そこで書かれていることに感動したので紹介したいと思います。

モノマネ人間には何も見えない

日本という国では、オリジナリティを持つことが許されない。積極的に生きようとしてもまわり中から足を引っ張られる。

それは日本の道徳観から来ている。特に徳川三百年という大変長く、しかも非常に強固な封建制は、たとえば、一度農民の子に生まれれば一生農民であり、商売でも豆腐屋の子に生まれたら一生豆腐を作るより手がない。そういうふうに自分の運命が決められてしまって、そこから出るわけにいかない。もし出ようとしたら叩かれるし、秩序を乱す。非道徳ということで仕置きされる。だから自分で運命を切り開くことができない。町人は町人、武士は武士、しゃべることもすることも、生活の行動範囲から、考える範囲まで全部決まっている。

明治時代に入り、国家の近代化とともに、立身出世とか、野心で一旗あげて出世しようという人が出て、その時代には憧れ、美談になったけれど、一般の気持ちとしては、それは夢物語のこと、実際には自分の分限というものを考えてしまう。自分の分限を考えた方が、他人と接する時に都合もいいし、無難に生活できた。また、日本というのは狭い国で、その中で大勢の人間がぶつかり合っているから、しょっちゅう監視されており、行動するには前後左右にぶつかってしまうのだ。そういうとき、諦めてしまわなければ、とても息もつけないということになるわけだ。

だが、現代のわれわれにとって、これは大変な間違いであると僕は思う。いままでは、謙虚であるということが世渡りの第一歩みたいなものだと考えられてきた。だが僕の考え方では、それは非常に傲慢だとはいえないが、不遜だと思う。というのは、自分はどのくらいの能力があり、どのくらいのことをすべき器であるかということを見極めようともしないで、つまり、自分のことが自分でわからないのに、勝手に自分はダメだと見切り、安全な道をとってしまう。

このように自分を限定してしまい、その程度の人生で諦めてしまえば、これは安全な一生、だが、自分が今の自分を否定して、さらに進み、何か別な自分になろうとするには大変な危険を伴う。

そして、ほとんどの人はこの危険に賭けようとはしない。それは、いままでに危険に賭けて失敗した人がいたり、また危険に賭けない方がいいというムードが日本人全体にあるからだ。このムードに従って、みんな、自分の分限を心得てしまい、消極的にしか生きていない。ただ、マメに働いて、質よりも量で自分の働きの価値付けをしようとするところがある。だが、それではダメだ。

夢を見るることは青春の特権だ。

これは何も暦の上の年齢とは関係ない。十代でも、どうしようもない年寄りもいるし、七十、八十になってもハツラツとして夢を見続けている若者もいる。

だから年齢の問題ではないが、青年の心には夢が燃えている。だが、そういった夢を抑圧し閉ざしてしまう社会の壁がこの時代にはあまりにも多すぎる。

僕は口が裂けてもアキラメロなどとはいわない。

それどころか、青年は己の夢にすべてのエネルギーを賭けるべきなのだ。勇気をもって飛び込んだらいい。

仮に親の顔色を伺って就職し、安定を選ぶとしようか、が、それが、青年自身の人生なんだろうか。“俺は生きた！！”といえる人生になるだろうか。そうじゃないだろう。親の人生をなせるだけになってしまふ。そんな人生に責任が持てるだろうか。若者自身の本当の生きた人生には決してならない。

夢に賭けても成功しないかもしれない。でも、失敗したっていいじゃないか。不成功を恐れてはいけない。人間の大部分の人々が成功しないのが普通なんだ。パーセンテージの問題でいえば、その九十九%以上が成功していないだろう。

しかし、挑戦した上での不成功者と、挑戦を避けたまでの不成功者とではまったく天地の隔たりがある。挑戦した不成功者には、再挑戦者としての新しい輝きが約束されるだろうが、挑戦を避けたままでオリてしまったやつには新しい人生などはない。ただただ成り行きに任せてむなしい生涯を送るに違いないだろう。

それに、人間にとて成功とはいったい何だろう。結局のところ、自分の夢に向かって自分がどれだけ挑んだか、努力したか、ではないだろうか。

夢がたとえ成就しなかったとしても、精一杯挑戦した、それで爽やかだ。

30年前、平成元年の前の年に書かれた、「大阪万博・太陽の塔」の製作者の叫びです。

全然古くないです。

7年後、20歳から22歳の若者に成長されている皆さんも含め、万博を夢見る人が、これから7年間、何かに精一杯挑戦することが、大阪万博を開催する意義ではないかと思います。

7年後には私は65歳になりますが、私も、自分の夢に精一杯挑戦したいと思います、ともに成長していきましょう。

では、1月7日に、またここで、元気にお会いしたいと思います。よいお年を！

平成30年12月25日 山本 哲哉